

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02804

研究課題名（和文）日英語ならびに西欧諸語における時制とその関連領域に関する発展的研究

研究課題名（英文）An Advanced Study of Tense and Related Areas in Japanese, English, and Other West-European Languages

研究代表者

和田 尚明（Wada, Naoaki）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40282264

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日英語ならびに独仏蘭語などの西欧諸語の時制・アスペクト・モダリティにかかわる現象（TAM現象）を、研究代表者の理論を進化させた「包括的時制解釈モデル」の観点から考察した。この理論を基に、人称・数・法と一体化した時制形態素をもつ西欧諸語は、伝達の主体としての話者である「公的自己」を中心としたTAM現象を示すのに対し、西欧諸語とは異なる時制形態素をもつ日本語は、思考・意識主体としての話者である「私的自己」を中心としたTAM現象を示すことを実証した。また、公的自己中心（志向）の言語間で異なるTAM現象については、C-牽引（話者意識への引き寄せ）の度合いの差に還元させる分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語と複数の西欧諸語（英独仏蘭西語）の時制・アスペクト・モダリティ・心的態度に関する現象について、包括的な時制解釈モデルに基づいた統一的観点からの比較・対照研究はほとんど行われておらず、加えて一般的な言語使用モデルと連携した形で、発話行為やダイクシス、主観性などの語用論的分野にまで分析範囲を広げて行われた研究はこれまで皆無であったため、新しい研究の方向に道筋をつけたという点が、本研究の学術的意義である。また、言語使用者の観点に立って解釈モデルを構築しているため、日本人がこれらの外国語の時制ならびにその関連現象を学ぶ際の助けになると期待できる点が、本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：This study investigated tense, aspect, and modality phenomena (TAM phenomena) in not only Japanese and English but also other West-European languages such as German, Dutch, and French from the theoretical perspective of the “comprehensive model of tense interpretation.” It was clarified that West-European languages, which have tense morphemes integrated with person, number, and mood, show TAM phenomena centering around the public self (i.e., the speaker as the subject of communicating), whereas Japanese, which has those not integrated with such deictic categories, shows TAM phenomena centering around the private self (i.e., the speaker as the subject of thinking or consciousness). It was also shown that the differences of TAM phenomena among languages centering around (oriented to) the public self are attributed to their differences in the degree of C-gravitation (i.e., gravitation toward the consciousness of the speaker).

研究分野：人文学

キーワード：時制 アスペクト モダリティ 心的態度 （間接）発話行為 比較研究

## 1. 研究開始当初の背景

近年の時制研究は、様々な理論的立場から複数言語を対象に盛んに行われてきており、伝統的な記述的分析から、時間パラメータに基づく分析、生成文法に基づく分析、形式意味論に基づく分析(生成文法とのハイブリッド型を含む)、認知言語学(認知文法)に基づく分析、構文文法に基づく分析、談話表示理論に基づく分析、関連性理論に基づく分析、メンタルスペースによる分析、オリジナルの枠組みによる分析に至るまで多岐にわたっている。しかしながら、そのほとんどが西欧言語(特に、英語)を中心に立てられた理論的枠組みに基づいており、日本語と英語をはじめとする西欧諸語の間に見られる言語体系的な違いはあまり考慮されずに、時制ならびにその関連現象の分析が行われてきたきらいがある。両者を「対等」の立場から眺めて構築された理論は、筆者の知る限り、数えるほどしかなかった(中右 1994、Sawada 1995)。

そのような背景の中で、研究代表者は中右(1994)・Janssen(1996)の「定形・非定形の時制論」やDeclerckの一連の研究(1991, 2006)における「時間領域時制論」に、Hiroseの一連の研究(1995, 2015)における「公的自己・私的自己論」ならびに「言語使用の三層モデル」(文法と語用論に関する一般的言語理論)を融合させることで、(日英語を含む)通言語的な説明概念・道具立てに依拠した時制解釈モデルを構築してきた。その過程において、平成19~22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))『日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究』や平成24~27年度科学研究費補助金(基盤研究(C))『日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究』での研究活動を通じて、立ち位置が似ている認知言語学的・機能論的・語用論的枠組みによる研究や文法化・主観化に関する研究との比較検討を行いながら随時修正を試み、上記モデルをアスペクト、モダリティ、心的態度、証拠性、主観化・主体化なども包括的に扱えるモデルへと発展させ、「発展型包括的時制モデル」へと進化させてきた。

これまでの研究で明らかになったこととして、大きく次の2点がある。

(1)まず、時制構造(文法的時間を構造化したもの)を構成する要素として、人称・数・法と一体化した時制形態素(A-形態素)のような直示範疇と一体化していない時制形態素(R-形態素)ならびに動詞(述語)語幹があり、西欧諸語の定形動詞はA-形態素と動詞語幹から成る絶対時制形式であるのに対して、日本語の定形述語はR-形態素と述語語幹から成る相対時制形式である。この時制構造の違いが、両タイプの言語の時制関連現象の相違の根底にある。また、言語環境・解釈環境の特徴の影響を受けることで、両タイプの言語がどのように絶対時制(直示的)解釈ならびに相対時制(非直示的)解釈を受けるのかについても、いくつかの環境において明らかになっている。

(2)次に、こういった時制体系の相違は、とりわけ日英語に関しては、私的自己(話者の思考・意識主体としての側面)を中心とする文法体系をもつ日本語と公的自己(話者の伝達・報告主体としての側面)を中心とする文法体系をもつ英語の言語類型論的な特徴に還元できることが、様々な言語現象の考察から明らかになってきている。また、公的自己中心の文法体系をもつ西欧諸語の中で時制・相・法現象にかなりの違いがあるという事実については、C-牽引(話者意識への引き寄せ)という概念が西欧諸語の公的自己中心性の度合いの差を生み出し、それが当該現象の一因であることも、ある程度明らかにされてきている。

## 2. 研究の目的

上記の研究背景から、本研究では、研究代表者の包括的な時制モデルをより汎用性の高い、より精緻な理論へと発展させた「包括的時制解釈モデル」に基づいて、日本語ならびに英語を中心とした西欧諸語における時制・アスペクト・モダリティ現象(TAM現象)の説明を行うことを目的とする。具体的には、以下の2点に焦点を当てて研究を進めることとする。

(1)日本語と西欧諸語におけるTAM現象ならびにそれに関連する心的態度・発話行為・主観性・視点などの現象に関して、時制構造の相違、文法体系が私的自己中心か公的自己中心かの相違、ならびに、言語環境・解釈環境の特徴の相互作用、に基づいた体系的説明を行う。

(2)公的自己中心である西欧言語間でTAM現象に差異が生じる点に関して、C-牽引の度合いの相違ならびにそれに基づく公的自己中心性の度合いの違いがどのように影響しているのか、そのメカニズムのさらなる解明を目指す。また、C-牽引と、言語相対化を可能にする他の認知的装置、例えば、認知モード(中村 2016)との関連についても明らかにする。

## 3. 研究の方法

「2. 研究の目的」で述べた2点を押し進める際、以下の4つの単位を中心に研究を進めた。

(1)関連する理論群との比較検討による包括的時制解釈モデルの修正・発展・精緻化(研究代表者・和田尚明)

(2)日本語と(英語を中心とした)西欧諸語の時制・アスペクト・モダリティ・心的態度・発話行為の相違に関する、「公的自己中心言語・私的自己中心言語」という類型論的観点からの比較分析(研究代表者・和田尚明)

(3)日英独蘭仏語の時制・アスペクト・モダリティ・心的態度・発話行為の相違に関する、C-牽

引ならびにそれに関連する認知的概念装置を用いた比較分析（研究代表者・和田尚明）  
 (4)分岐的時間論、認知モード、アフォーダンスなどの認知的概念装置を用いた、日本語ならびに（フランス語を中心とした）ロマンス諸語の時制・アスペクト・モダリティ・心的態度・発話行為の相違に関する比較研究（研究分担者・渡邊淳也）

これら 4 つの単位で別々に進める研究の成果の公表の場として、研究分野が近い研究者や大学院生も交えた定期研究会を年に 5~6 回程度開催し、意見交換や成果の共有を図ることで、各研究単位へのフィードバックを行うこととした。また、本課題のテーマに沿った言語講演会も行うことで、異なる観点から本研究を見直す機会を確保することとした。

#### 4. 研究成果

(1)「3. 研究の方法」(1)の包括的時制解釈モデルの修正・発展・精緻化に関しては、個々の TAM 現象ならびにその関連領域における現象の分析を通して、その中核部分に変動がないことが確認された一方で、モダリティや心的態度に関する部分の発展・拡充を行い、特に、言語使用の三層モデルとの関係をより詳しく示すことができた。また、言語環境・解釈環境が時制解釈にどのように影響を与えるのかについて、具体的なケースを詳細に検討することで、時制解釈レベルにおける TAM 現象の解釈メカニズムをより精緻化することができた。詳しくは、(2)以下で述べる。  
 (2)明らかになった本モデルの中核部分は、以下のとおりである。時制構造レベルと時制解釈レベルの区別は、本課題の関連言語すべてにおいて有効である。西欧諸語の定形動詞は A-形態素をもつ絶対時制形式であるのに対して、西欧諸語の非定形動詞と日本語の述語（定形・非定形ともに）は R-形態素をもつ相対時制形式である。時制解釈レベルにおいては、どちらの時制形式も当該言語環境・解釈環境の影響を受けて、絶対時制（直示的）解釈か相対時制（非直示的）解釈を受ける。解釈の際に影響を与える主要因として、モダリティ・心的態度と当該言語環境の特徴が関わることが想定されていたが、本課題を通して、文発話の意味的構成を成す「命題領域」「対事心的態度」「対人心的態度」の 3 つの意味領域と、言語使用の三層モデルを構成する「状況把握層」「状況報告層」「対人関係層」の 3 つの認知部門の対応関係が示され、公的自己中心の西欧諸語と私的自己中心の日本語ではどこが共通し、どこが違うのかを明確にした。その結果は、図 1・2 にまとめられる。

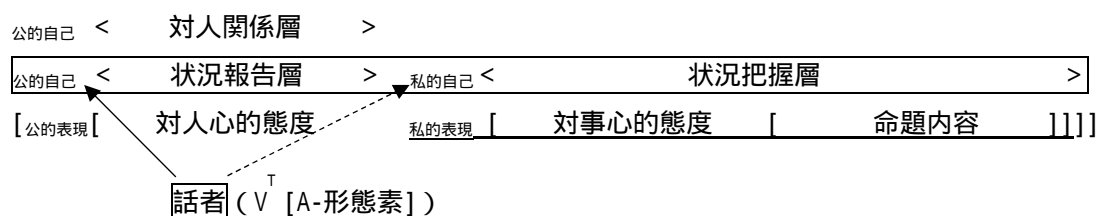


図 1：公的自己中心言語版（英語・ドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語）

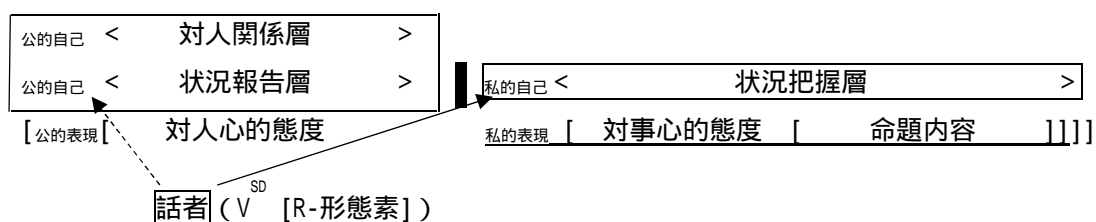


図 2：私的自己中心言語版（日本語）

命題内容と対事心的態度が私的表現（聞き手への伝達意図が伴わない話者の思いを反映した言語表現）を構成し、状況把握層に対応するのにに対し、私的表現に対人心的態度が加わると公的表現（聞き手への伝達意図が伴う話者の思いを反映した言語表現）を構成し、状況報告層に対応する。デフォルトの言語特性として、公的自己中心言語では（私的自己が主体の）状況把握層と（公的自己が主体の）状況報告層が合体しており、公的表現レベルの言語的特徴が随所にみられるのに対し、私的自己中心言語では状況把握層が独立しており、私的表現レベルの言語的特徴が随所にみられる。また、公的自己中心言語では話者の公的自己の側面が、私的自己中心言語では話者の私的自己の側面が優先する。V<sup>T</sup>は話者の時制視点（時制形式に内在化した文法的時間の直示的中心）を、V<sup>SD</sup>は状況視点（話者が当該状況を見る（測る）際の基点・視座）を表す。

例えば、命題内容のみで構成される言語環境である時間節では、当該命題内容は主節の命題内容と融合した複合命題を構成するため、時制解釈は通例主節時基準となるが、命題内容と対事心的態度で構成される言語環境である間接話法補部では、対事心的態度は私的自己に帰される。後者の言語環境では、私的自己中心の日本語の場合、時制形式の選択も私的自己に帰され、公的自己が関わることはないが（「ジョンはメアリーは病気だといった」の補部では、時制形式の選択も原話者である私的自己に帰される）、公的自己中心の英語の場合、時制形式の選択は公的自己

に帰され、公的自己の心的態度が関与することが可能である（いわゆる「時制の一致」の例外現象である John said that Mary is sick. の補部には、現在形の選択とともに伝達者である公的自己に帰される「断定」のモダリティが上書きされる）。

(3) 「3. 研究の方法」(2)の「日本語と西欧諸語（特に英語）の TAM 現象の相違に対する「公的自己中心言語・私的自己中心言語という類型論的特徴」からの比較分析」に関しては、主に、モダリティ・心的態度と（間接）発話行為、物語の地の文における定形・非定形の時制・視点現象、話法と時制・アスペクト・視点・主観性に関する現象、未来表現に関する現象、条件節における時制・アスペクト・モダリティ現象などの諸現象に対して、図 1・2 で示した 2 つの言語タイプの特徴に基づく統一的説明を行い、本モデルの実証的研究を行った。

(4) 「3. 研究の方法」(3)の「C-牽引や関連する認知的概念装置を用いた分析」に関しては、以下の 3 点が明らかとなった。

まず、公的自己中心である西欧諸語間における TAM 現象に差異がみられる点については、公的自己中心性の度合いが最も高い英語では、公的自己の意識（consciousness）がおかれる発話時を卓立させる（目立たせる）時制形式や意味機能を多数発展させているのに対して、公的自己中心性の度合いがさほど高くない独仏蘭語にはそういった時制形式や意味機能が欠けていたり、あまり発展していないことが分かった。

次に、私的自己中心の日本語では有標となる公的自己志向の言語環境において、C-牽引がどの程度関与するかという点については、日本語でも（3人称）小説の地の文は聞き手（読み手）を前提とした公的自己志向の言語環境であるため、C-牽引の発動による説明が可能であることが示された。

さらに、同一話者の私的自己が公的自己から遊離することで、私的自己中心の日本語の TAM 現象がユニークになっている点（例：独立節で未来指示の「ル」形（非過去形）に伴う「断定」のモダリティが、未来時に移動した私的自己に帰されるといった現象）についても明らかにした。

加えて、認知モードが C-牽引・公的自己中心性とどのような関係にあるのかについては、次のようなことが分かった。英語で D-モード（Displaced Mode）が多く発動するのは、多くの言語環境で発話時（往々にして、描写対象とは距離を取る時点）におかれる公的自己を中心とした公的自己中心性の度合いが極めて高いからであり、それゆえ、公的自己の意識への引き寄せである C-牽引の発動機会が多くなるためである。また、日本語で I-モード（Interaction Mode）が多く発動するのは、日本語が私的自己中心であるために多くの言語環境で発話時におかれる公的自己から自由に私的自己が遊離し、それゆえ、各言語環境に入り込んだ私的自己を志向する現象が多くなるためである。

(5) 「3. 研究の方法」(4)の「分岐的時間論や認知モードなどの認知的概念装置を用いた日本語とロマンス諸語の TAM 現象の比較分析」に関しては、概して公的自己中心性の度合いが英語よりも低いロマンス諸語（特に、フランス語）では、C-牽引と同様、認知モードに関しても日本語に多い I-モードと英語に多い D-モードが混在することが多いこと、フランス語の話法における TAM 現象も基本的に公的自己中心言語の特徴を示しつつも、英語よりも公的自己中心性の度合いが低いことを示す現象がみられること、フランス語とその他のロマンス諸語の TAM 現象の比較研究を通して、TAM 表現の解釈メカニズムがロマンス諸語間で異なるのはなぜか、を明らかにした（この点は、今後、C-牽引や公的自己中心性の度合いに結び付けて考察できる見込みがある）。

(6) 研究成果の一部として、言語使用の三層モデルと C-牽引による説明は、日英語以外の言語で、ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語にも適用できることを示した（廣瀬、ほか 2022）。

#### < 引用文献 >

- Declerck, R. (1991) *Tense in English: Its structure and use in discourse*. London: Routledge.
- Declerck, R. [in cooperation with S. Reed and B. Cappelle] (2006) *The grammar of the English verb phrase volume 1: The grammar of the English tense system: A comprehensive analysis*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Hirose, Y. (1995) "Direct and indirect speech as quotations of public and private expression," *Lingua* 95, 223-238.
- Hirose, Y. (2015) "An overview of the three-tier model of language use," *English Linguistics* 32, 120-138.
- 廣瀬幸生、ほか (2022) 『比較・対照言語研究の新たな展開 三層モデルによる広がりや深まり』 開拓社.
- Janssen, T. (1996) "Tense in reported speech and its frame of reference," In T. Janssen and W. van der Wurff (eds.) *Reported speech*, 237-259. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 大修館書店.
- 中村芳久 (2016) 「Langacker の視点構図と（間）主観性 認知文法の記述力とその拡張」 中村芳久・上原聡（編）『ラネカーの（間）主観性とその展開』 1-52. 開拓社.
- Sawada, H. (1995) *Studies in English and Japanese auxiliaries: A multi-stratal approach*. Tokyo: Hituzi.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 23件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Naoaki Wada	4. 巻 -
2. 論文標題 Tense Choice and Interpretation in First-Person Stories: A Contrastive Study of English and Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Aspects of Tenses, Modality, and Evidentiality (Cahier Chronos 31)	6. 最初と最後の頁 32-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/9789004468184_004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明, 志村春香	4. 巻
2. 論文標題 Be Going Toの「依頼」用法について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告	6. 最初と最後の頁 123-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naoaki Wada	4. 巻 40
2. 論文標題 Be Going To and Aller: A Temporal Structure Approach	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 171-203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻
2. 論文標題 フランス語の連結辞ceci dit, cela ditと語用論化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 構文と主観性	6. 最初と最後の頁 119-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻
2. 論文標題 分岐的時間のモデルからみたフランス語の法動詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告	6. 最初と最後の頁 103 - 121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 無
2. 論文標題 日本語と英語の時制・アスペクト・モダリティならびにその関連現象 包括的時制解釈モデルによる分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 TAMEに関する多言語研究と認知モード	6. 最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 無
2. 論文標題 日英語の三人称小説における時制形式選択とその関連現象 - 言語使用の三層モデルとC-牽引に基づく分析 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 [研究プロジェクト] 時間と言語 文法研究の新たな可能性を求めて	6. 最初と最後の頁 231-260
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 無
2. 論文標題 英語の「した」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す2: 「した」「している」の世界	6. 最初と最後の頁 137-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 無
2. 論文標題 フランス語半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 [研究プロジェクト] 時間と言語 文法研究の新たな可能性を求めて	6. 最初と最後の頁 261-289
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 220
2. 論文標題 Etude contrastive de quelques connecteurs formes sur le verbe <<dire>> en francais et en japonais	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Langages	6. 最初と最後の頁 21-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3917/lang.220.0021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 無
2. 論文標題 認知モード、アフォーダンスとフランス語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 TAMEに関する多言語研究と認知モード	6. 最初と最後の頁 167-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 26
2. 論文標題 フランス語の単純未来形と条件法 叙法的対立とその源泉	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語・情報・テキスト	6. 最初と最後の頁 63 - 78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 34
2. 論文標題 フランス語の条件法現在形・条件法過去形とロマンス諸語における対応形式の対照研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 筑波大学フランス語・フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 57-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 18
2. 論文標題 新しい学説はどのように外国語教育に貢献するのかーモダリティ・心的態度・間接発話行為の日英の違いを言語使用の三層モデルから説明するー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 28 - 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naoaki Wada	4. 巻 無
2. 論文標題 C-gravitation and the grammaticalization degree of "present progressives" in English, French, and Dutch	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 New Trends in Grammaticalization and Language Change	6. 最初と最後の頁 207-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 33
2. 論文標題 フランス語大過去形の特徴的用法について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 筑波大学フランス語・フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 81-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 51
2. 論文標題 フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ロマンス語研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 -
2. 論文標題 言語使用の三層モデルと時制・モダリティ・心的態度	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ	6. 最初と最後の頁 44-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也, ダニエル・ルポー	4. 巻 5
2. 論文標題 フランス語のsujetおよび対応する日本語の研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フランス語学の最前線	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 -
2. 論文標題 フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 構文の意味と拡がり	6. 最初と最後の頁 223-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也, 小川紋奈	4. 巻 -
2. 論文標題 フランス語の単純未来形・前未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 諸言語におけるTAMEの発現について	6. 最初と最後の頁 59-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田尚明	4. 巻 -
2. 論文標題 日英語の話法と時制ならびにその関連現象ー包括的時制解釈モデルによる分析ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比較・対照言語研究の新たな展開ー三層モデルによる広がりや深まりー	6. 最初と最後の頁 35-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也, 佐多明理	4. 巻 -
2. 論文標題 フランス語の接続法とポリフォニー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比較・対照言語研究の新たな展開ー三層モデルによる広がりや深まりー	6. 最初と最後の頁 211-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊淳也	4. 巻 1
2. 論文標題 フランス語とコルシカ語における条件法の対照研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発話言語学研究	6. 最初と最後の頁 40-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Naoaki Wada and Haruka Shimura
2. 発表標題 On the 'request' use of be going to
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (IPrA 17) (オンライン) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊淳也・佐多明理
2. 発表標題 フランス語の接続法とポリフォニー
3. 学会等名 日本フランス語学会例会第334回例会 (オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 和田尚明
2. 発表標題 英独語の単純現在形の「未来時指示」について
3. 学会等名 第8回TAME研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊淳也
2. 発表標題 フランス語の接続法とポリフォニー
3. 学会等名 第9回TAME研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoaki Wada
2. 発表標題 On the so-called volitional use of will: Semantic or pragmatic or both?
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Haruka Shimura, Naoaki Wada, and Hiroko Wakamatsu
2. 発表標題 The indefinite use of the Present Perfect Progressive and its emotional effects
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊淳也
2. 発表標題 フランス語大過去形の特徴的用法について
3. 学会等名 日本フランス語学会第326回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊淳也
2. 発表標題 フランス語の単純未来形と条件法：叙法的対立とその源泉
3. 学会等名 日本フランス語学会2019年度シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoaki Wada
2. 発表標題 Temporal phenomena in first-person stories: A contrastive study of English and Japanese from a perspective of the three-tier model of language use
3. 学会等名 Chronos13 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoaki Wada
2. 発表標題 How to express (indirect) speech acts in English and Japanese: A perspective from the three-tier model of language use
3. 学会等名 The 5th International Conference of the International Society for the Linguistics of English (ISLE5) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Jun-ya Watanabe
2. 発表標題 Gerondif non-coreferentiel et les modes de cognition
3. 学会等名 Chronos13 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊淳也
2. 発表標題 フランス語の半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト再論
3. 学会等名 東京フランス語学研究会第39回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoaki Wada
2. 発表標題 The Three-Tier Model of Language Use and Indirect Speech Acts: A Contrastive Study of Japanese and English
3. 学会等名 The 14th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 和田尚明
2. 発表標題 言語使用の三層モデルとモダリティ・心的態度・間接発話行為
3. 学会等名 第99回待兼山ことばの会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 和田尚明
2. 発表標題 新しい学説はどのように外国語教育に貢献するのか モダリティ・心的態度・間接発話行為の日英の違いを言語使用の三層モデルから説明する
3. 学会等名 日本語文法学会第18回大会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊淳也
2. 発表標題 フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス
3. 学会等名 日本口マンズ語学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊淳也
2. 発表標題 フランス語の単純未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究
3. 学会等名 東京フランス語学研究会第35回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Jun-ya Watanabe
2. 発表標題 Ceci dit, cela dit, towaie, toittemo
3. 学会等名 Approche contrastive franco-japonaise sur la grammaticalisation, la lexicalisation, le figement
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naoaki Wada
2. 発表標題 Tense and Aspect in Conditionals: A Contrastive Study of English and Japanese
3. 学会等名 International Conference on Tense and Aspect in Conditionals (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 和田尚明
2. 発表標題 Be Going ToとGaan : 英蘭語のG0-未来の対照研究
3. 学会等名 第14回TAME研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊淳也
2. 発表標題 フランス語とコルシカ語における未来諸時制の対照研究
3. 学会等名 日本ロマンス語学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡邊淳也
2. 発表標題 フランス語とコルシカ語における条件法の対照研究
3. 学会等名 第16回TAME研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 和田尚明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 444
3. 書名 The Grammar of Future Expressions in English	

1. 著者名 渡邊淳也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 181
3. 書名 叙法の謎を解く	



1. 著者名 渡邊淳也	4. 発行年 2017年
2. 出版社 早美出版社	5. 総ページ数 118
3. 書名 コルシカ語基本文法	

1. 著者名 和田尚明・渡邊淳也	4. 発行年 2022年
2. 出版社 TAME研究会	5. 総ページ数 153
3. 書名 時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告	

1. 著者名 渡邊淳也・和田尚明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 TAME研究会	5. 総ページ数 184
3. 書名 TAMEに関する多言語研究と認知モード	

1. 著者名 渡邊淳也・和田尚明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 TAME研究会	5. 総ページ数 82
3. 書名 諸言語におけるTAMEの発現について	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	渡邊 淳也  (WATANABE JUN-YA)  (20349210)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授     (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関